

「まああれじゃの。やはり大名行列に化けて見せるというのは即ち死亡ふらぐと言えよう。或いは芝右衛門の奴の狡猾な企みかも知れんが、どっこいあ奴も結果的にそれで死んだぞな」
柔らかな日差しの下、命蓮寺の縁側で田舎羊羹を美味しそうに食みながら二ツ岩 マミゾウはカラカラと笑った。

「はあそれはそれは、化け学も難しいものなんですな」

マミゾウの隣、湯呑から短い音を立てて玉露を啜りながら聖白蓮は微笑んだ。

「左様。ひじりんも一道を究めんとする身ならば、少なくともそれが元で死ぬような事は避けねばならんじやろな」

「肝に銘じます」

「うむうむ。あーしかし無添加の羊羹は実に美味しい、美味過ぎる」

「まだ沢山ありますが、余り食べてしまうと他の者が不満を持ちますから……」

「分かっておるで、いくら儂でも独り占めはせん」

控え目に、と白蓮から視線で訴えられれば、マミゾウは再度カラカラと笑った。見ていて気持ちの良い笑顔だ。

長閑な日和である。

妖怪寺たる命蓮寺もまた平和であり、時折参道の方から幽谷響子の読経が風に乗って聞こえて来たり、墓の方から多々良小傘に驚かされたのであろう誰かの悲鳴が聞こえたりもした。

全くの日常と言えよう。

ただ、命蓮寺的に余り尋常では無いのが今縁側でお喋りの真つ最中である二人の内の片方だ。マミゾウである。

常であればこの名のある化け狸は幻想郷の外におり、つい最近まで白蓮と面識も無かったのだ。にも関わらず今や中々の仲良し振り。単にマミゾウの長話をはいはいと聞くのが白蓮だけという事でもあるが、それを置いてもやはりと言うか、相性と言うか。

ともあれ何故この現状があるかについて、原因は最近の事である。

折角復活させてなるものか、と靈廟を蓋する様に寺まで建てておいたのに豊聡耳 神子が堂々の復活を遂げてしまった為、白蓮以下寺の者達があーでもないこーでもない和小田原評定を続けていたのだ。そこで封獣 ぬえが「人間側の超強力な存在が復活してしまったなら、バランスを取る為に妖怪側にも超強力な存在を用意すれば良いじゃん」と短絡的な一計を案じ、これぞ妙案と独断でそれを実行に移した。

そうしてわざわざ幻想郷の外から招聘されたのがぬえの旧友、マミゾウである。

或る日いきなり現れた大物妖怪に命蓮寺側は驚き、それからドヤ顔のぬえから事情を聞き、成る程それならばと歓待した。何せ命蓮寺の理念は人も妖怪も神も仏も全て同じと平等を唱えているのだ。平等とは拮抗状態であり、双方に相應の力があれば互いに手を出せず、平穏が生まれるもの。人間側の神子に対するなら、妖怪側に大妖怪の一人も加わらねば到底白蓮の唱え

る理は意味を為さないのだ。

之を以つてぬえは以前やらかした自らの失態を雪ぎ、晴れて堂々と命蓮寺に出入り出来る身分となつた。後はマミゾウと共に神子ら復活組の対策を講じるのみである。

ただ、ぬえの得意満面したり顔もそう長くは続かなかつた。

あつさりマミゾウが敗れたからである。

それも神子ではなく博麗の巫女に。

考えようによつては、寝起きの半ボケ状態とはいえ神子を倒した巫女は当然神子より強いという事になり、そんな巫女にぬえと白蓮から教わつた通りの弾幕ごっこでうっかり十番勝負を挑んだなら敗退もやむをえまい。その後マミゾウとぬえに対する、白蓮を除いた命蓮寺側の扱いが若干掌返し気味になつたのも無理からぬ事だ。

特にぬえは自らの行動により巫女を呼び寄せたようなものであり、マミゾウに先んじてその巫女に喧嘩をふつかけたら一蹴されたというのもしなかつた。折角失態を雪いだのに再びやらかしてしまつたのである。なので最近では命蓮寺内の居心地の悪さに再度の名誉挽回の機会を虎視眈々と狙うぬえだつた。

一方で、曲がりなりにも大妖怪、それに幻想郷ルールに不慣れでもあろうという点から、マミゾウの方は現在こうして白蓮と菓子付きで茶飲み話に興じられている。そもそものが命蓮寺初来訪時に、寅丸 星以下白蓮以外の命蓮寺の者達を一瞬でも萎縮させていたのだ。正体不明を

モットーとする天邪鬼あまのじやくなぬえと、三大狸の一として実に泰然たいぜんじやく自若としたマミゾウ、というこの差も大きいだろう。

「ところで」

「なんじゃ」

「今後の逗留場所とうりゆうですが、やはり此方こちらで？ 他が良ければ、可能な範囲で世話もしますが」

「あー……」

里も近いですし、と白蓮に話を振られ、マミゾウは宙を仰いで軽く頬ほおを搔かいた。

助っ人として呼ばれた手前、いつまでも食客しょっかくを気取る訳にもいかないのだが、かと言ってあの不手際。流石に寺には居られまいし、幻想郷の土産話を持って佐渡に帰ろうかとも思っていたのだ。

それを粘り強く引き止めたのは白蓮だった。

白蓮からすれば今マミゾウに帰られては都合が悪過ぎるのである。何せ折角再び整いかけていたバランスが崩れてしまう。神子もマミゾウも倒した巫女がその立ち位置をはつきりと明示してくればまだ何とでもなりそうなのだが、あの巫女は風見鶏かざみどりのように気まぐれで数に勘定するのは危険である。ならば当初の目的通り、マミゾウで神子との拮抗きょこうを生みださなければ人と妖怪の平等は遠のいてしまうのだ。

「ま正直ねつと回線も無いド田舎いなかで暮らせと言うのも中々な」

命蓮寺の朝は早い。

午前五時には既に白蓮以下殆どの者が起床を済ませ、本尊の前に読経が始まっている。

その読経を目覚まし代わりに目を覚ますのがマミゾウだった。

まず本堂から聞こえる経でやんわり瞼が開き始め、本堂からの経を復唱する響子の大声で瞼が開ききる。彼女のそれは調子や音程に若干の狂いがある為、不協和音が発生して頭痛を伴うから辛い。

「うぐ……む……」

じわじわくる頭痛に片手で額を押さえた後、もう片方の手で枕もとの眼鏡を探り、発見、装着。布団を除けがてらゆっくり身を起こし、欠伸、背伸び、脱力。

「はあー……」

寝起きの倦怠感に再度眠気に敗れそうになるが、その前に響子の調子外れな経が頭に響いたのでもはやマミゾウは寝るのを諦めた。

「……これはこれでとんだ誤算じゃったわー」

長閑な田舎暮らしを謳歌出来るかと思っていたのがこれである。寺を甘く見ていた訳では無いが、響子の存在がいけなかった。諦められるだけでなく早く完全に覚えて貰いたいものだ。山彦は基本劣化反射なので期待してはいけいのかもしれない。

布団から出、曇み、襦袢一枚のままだが襖を開けて部屋の外へ。所詮女所帯だ、それに今な

ら口うるさいのに見つかる事も無いし少し外の空気を吸いに行くくらいは構うまい。

——などと思っていたら閃光せんこうを浴びた。

「……む？」

今となつてはちよつと懐かしさすら感じるそれにマミゾウが数度目を瞬かせば、やはり。

「や、どうもどうも清く正しき文々。新聞の者でございますよ！」

襖を開いた先の空間、庭の空中にて笑顔大満開の鴉天狗。先程フラッシュを焚たいたカメラを手にした射命丸 文が朝から元気一杯夢一杯。

「幻想郷はまだそういうの無いと思つとつたが、あるもんじゃのう」

「一般には流通していませんが、山の方じゃそう珍しいものでも無いんです」

「ほー」

「と言う訳で最近幻想郷に越して来たと評判の佐渡の二ツ岩氏の貴重な一枚を撮影する事に成功しました！ これを正面に持つてくれば……」

「……ああ」

部数アップ！ 部数アップ！ 大幅に！！ 大幅に！！ と握にぎり拳こぶしを震わせテンションを上げる文に、言われてみればとマミゾウは自分の姿を見下ろす。胸元とか股またの切り込みとか偶然だろ
うがギリギリだった。文の方からだと桜色がちよつと覗のぞいていたかもしれない。

数分後、カメラを取り上げられた文はマミゾウの部屋の奥側で土下座させられていた。

「流石に寝起きのちと恥ずかしな写真を撮られてはなあ」

襦袢じゆばんに満月夜空柄の羽織一枚を加えた格好で、マミゾウはかいた胡坐あぐらの上の黒猫を撫なでり撫なでり。黒猫は気分良さそうに喉のどを鳴らしていた。

「大変申し訳なく思っている次第ですので返して頂けませんか」

「おぬしの持ち物であれば、おぬしの元に勝手に帰っても良さそうなものじゃろが」

土下座する文に結構よくしま邪な笑みを見せるマミゾウである。

ちなみに文のカメラは現在マミゾウの胡坐の上で欠伸あくびをしていた。

「それはそうかと思いますが、今の状況はそちらの化け術のせいですしー」

「元を辿たどれば悪いのはおぬしなのは分かるところが」

「ですよー」

「後誰だれか面上げて良いと言ったかのう」

「大変すいません」

文は軽口を叩たたき顔を上げかけるも、マミゾウの一睨にらみで身を竦すくませる。強者に媚こび諂へつらうのを苦にしない天狗であれば、この姿勢は当然の事と言えた。

「それでー……：そういえば何の用じゃおぬし。こんな日の出も今一な朝つばらから」

顎あごを撫なで、マミゾウはそういえば何でこうなったかの大元が分からなかった事に気付く。

「取材に来たんですよ。こっちじゃ天狗は新聞刷るのが生業なりわいのようなものなんで」

「ほー。ああそういうえばさつき新聞がどうたら言つとつたな」

「ええ文々。新聞と申しましてですな」

言いながらすつちやと取り出した名刺を両手で差し出す文である。勿論頭は下げたまま。前に何処かで経験でもあるのか、それとも身体が柔らかいかいのか。そうそう無い状態だということに彼女の動きスムーズだ。

マミゾウはそれをひよいと受け取つて一瞥、首を傾げた。

「ぶんぶんまるしんぶんのしゃめいまるあやです」

その若干の間、その原因を知っているかのように文は先手を打つ。

「ああ……ああそういう。新聞はともかく洒落た氏名じゃのおぬし」

「いやあそれ程でも」

感心した風なマミゾウに、してやったりと頭を下げたまま文は口元を歪ませる。

それはそうだ。名刺にわざわざ振り仮名を振らず、一瞬読み方に詰まった相手の先手を取つて名乗るのが彼女の手なのだから。そうする事により、字面とその読み方が一層強く相手の頭に残り、ほぼ一発で覚えて貰えるようになる訳だ。小賢しげだが周到な策である。

「それで、射命丸は儂に取材と」

「記事にしますので。無論一面トップで」

記者にとつて一面トップと言うのはもつとも伝えなければならぬ大事な情報か、他の何処

——あの宴会の帰り、方々に散った狸達の一部が狐に襲われ、四匹の狸が大怪我をし、一匹の狸が殺された。更にその翌日には、大怪我を負わされた狸の内もつとも傷の深かった一匹も息を引き取っている。

「なん……じゃと？」

マミゾウがその訃報を聞いたのは、実際に事があつてから一週間以上が過ぎてからであつた。そして、文の新聞記事に対する命蓮寺の者達への対応に追われている間に事態は随分と進んでしまつている。

それはそうだ。今までだつてちよつかいをかけられた所で泣き寝入りで済ませていた訳では無く、劣勢ながらも一応は抗戦を絶やさなかつた以上、今回もまたその氣運が高まるのはどうしようもない必然と言えた。

いや、今回は今までの比ではあるまい。何せ事情が異なる。

「いかなあ、儂とした事がこうも大事な時にぶらいべーとに忙殺されるとは」

そして、その異なる事情であるマミゾウが溜息交じりに頭を掻いた所で物事が突然巧くいく筈も無く、初七日も過ぎてもうこれ以上血の氣の多い若い衆を抑えられない、と命蓮寺まで泣き付いて来た古狸達の方へ目をやる。

「いやさ、もう抑えずともよい。それによくぞ今日まで抑えておつてくれた、儂があの際の約定を違えた訳ではない事をすぐに証明しにゆこう」

不敵な微笑みと共にかけられた言葉に、古狸達はそれぞれ顔を見合わせた後万歳せんばかりに喜んだ。年寄り達はその功故に抗戦をやり過ぎる事が危険であると熟知しており、常に、我が意を殺して狐への抵抗を程々の所で治める様不本意ながら力を尽くしてきたのである。

当然それを知つてのマミゾウの言葉では無いが、それでも古狸達を己の戒めから解放するには充分過ぎた。

「うむ、うむ」

事その他大喜びする彼等に不自然さを感じないでもなかつたが、マミゾウはそれもまた己への期待と受け取つて心身を引き締める。

そうして、逸すような古狸達の案内を受けてマミゾウは狸の隠れ集会場の一つに案内された。鷲に塗れた崖の中程にある巧妙に隠された狸の印章に古狸の一人が念じれば、少し離れた明後日の方向に在る巨木のうろ穴の底がぼこつと音を立てて開く。

これにマミゾウはよくもまあと感心めいた息を吐いたが、状況がそうさせたのは明白だ。狐側からしたらこういう隠れ場所は可能な限り潰しておきたいに決まつている。

音のした方、底の抜けたうろ穴を覗けば梯子があり、そこを下る途中から言い争いの声が聞こえてきた。先行する古狸の一人は苦々しげに何をやつとるんだと呟く。本来なら誰か来た事を音で察知し、何者であるか誰何の警戒に神経を尖らせなければならぬものを。

やがて明確になる老若を問わぬ騒々しい怒声に罵声。若人は一刻も早い弔いを熱望し、老人

は若人の熱を何とか鎮めようと躍起になる。結果長机を挟んで両陣は掴みかからんばかりの勢いで口角泡を飛ばし、互いが互いに對し何故分かつてくれないのかと失望に近い思いを抱いてすらいた。

そこへ戸を叩き割らんばかりの勢いでやめんかと怒鳴り込んで来たのが、マミゾウを先導した古狸の一人である。

思わぬ方向からの乱入に座は静まり返り、集会場の一同がそちらを向けば怒りに顔を真っ赤にする古狸と、彼に続いて呆れ気味に入ってきたマミゾウが見て取れた。

ここにきてようやく、集会場に残った面々はこの場を去った古狸達がマミゾウを呼びに行っていた事を思い出し、それぞれづつが悪そうに居住まいを正す。

「あー、まあその、何じや」

自分に集まる視線に頬を搔いた後、マミゾウは場の一同と視線を交わし、不敵に微笑む。

「今から手近な狐の……集落か住処か、まあ何でも良いんじゃが。襲撃して来ようと思うが誰ぞ付き合はんか」

茶店に誘うかのような気軽さだった。

しかし狸達に与えた衝撃はそれどころでは無く、一斉の様々な反応がどよめきとなり、一拍置いて若者達が競うように我も我もとマミゾウの誘いに乗り放題な歓声を上げる。

熱狂する若者達に対し、顔を青くしたのは古狸達だ。

若者達に負けじと声を張り上げ、そもそも数の差が圧倒的である以上下手な攻勢に出ては壊滅の憂き目も十分にあり得る上、狐は激情に駆られた狸が見境無し^の報復に出るのを一網打尽にせんと常に手ぐすね引いて構えている。現に、今だってどんな狡猾^{うさかつ}な罠^{わな}が張られているか知れないのだ。

「なあに、そこは儂^{わづ}の力を以^もつてしてパツと行つてパツと帰る。これじゃ」

尚も気楽な調子のマミゾウに古狸達は不安を隠せないが、意気軒昂^{げんきげんぼう}な若者達を背に彼女はやはり不敵に笑う。これを無謀と見るか頼もしいと見るかで評価の分かれる所だが、そもそもがマミゾウの力の程について具体的に見知っている狸はこの場に居ない。古株や古参と言つた手合いでもせいぜい伝聞程度である。

ならば、一つ任せてみるのも手かもしれない。事ここに至つてはもはやどうにもなるまいし、と古狸達は若い衆を従えたマミゾウが襲撃に向かう事を止めるのを諦^{あきら}めた。無論、万が一の時はマミゾウ一人差し出してでも狸全体を守ろうという心算は忘れない。彼女が暫定でも頭領を承諾した事は真実なのだから。

「ではちよいと行つて来るから、留守番をお願いするよ」

そう言つて、狸達の先頭に立つたマミゾウは一路、若い衆の案内を受けて近場の狐の集落を目指した。

その道すがら、若い衆の話しを聞いてこれから攻める狐の集落についての情報を纏^{まと}めていく。